

「贈与」としてのボランティア

—— ボランティア活動に対するいくつかの視角Ⅲ ——

渡 邊 秀 司・富 川 拓

要 旨

この小論は、ボランティア活動を行なう個人的な目的と現代の社会状況の変化との関連を考察するため、外国人支援ボランティア活動に対する調査に先立ち分析のための視角を提示することにある。小論においては贈与という概念を前提として考えつつ、ボランティアとは何かということを簡単に述べ、さらに視点をかえて震災ボランティアに関わった宗教についての調査論文を紹介しながら、宗教がその教義に内包する贈与の考え方について述べた上で、贈与という側面からボランティアの考察は可能かということについて見解を述べた。

贈与とはなにか

ボランティアそのものについての関心が高まりを見せている。1997年には国連総会において2001年をボランティア国際年とする決議が採択された¹⁾。最近とくに“物の豊かさ”から“心の豊かさ”へと生活を見直していかなければいけない、と言われたりもする。ボランティアとは関係はないが、環境のいい田舎に家を構えて、都会にある職場へ2時間以上かけてやってくる人たちもいるそうである。利便性よりはゆとりある生活ということなのであろうか。“物の豊かさ”より“心の豊かさ”が求められている。

ボランティアが論じられるときにも、“物の豊かさ”と対比して“心の豊かさ”が論じられることが多々ある。私達はよく“心の豊かさ”と言う言葉を使って、今までの社会を批判しているが、心の豊かさとはいかにして得ることができるのであろうか。“心の豊かさ”とは、ボランティアを実践することでのみ得ることが可能なのであろうか。竹沢尚一郎は、他者に向かって自己を投げ出す行為としての贈与の概念から、

ボランティアのあり方について考えている。竹沢によれば、献身＝身を捧げる、自己を投げ与えると言うこのことばのうちにこそ、他者に対する関係性の変革のテクニックとしてのボランティア活動の本質が示されていると言う（竹沢1997）。献身と言う自己の贈与が関係性の変革のテクニックだとすると、それはボランティアと言う特定の次元においてのみ、成立しうるものであるのだろうか。

もともと贈与とは、家族や恋人たちなどごく親しい関係において行われるものから、政治献金、恩人へのお礼など、多岐に渡る社会関係を示す。AとBという二人がいて、AがBに贈与を行いBもまたAに贈与を行う場合、それは一種の交換関係になる。対してAがBに贈与を行い、Bがそれに応えないとしてもAが周囲から賞賛を受けるようなことがある場合、それもまた間接的な交換となる。そして、Aの贈与のみが行われる場合、それは純粹な贈与となる。こうした贈与は、友情や信頼といった社会関係を強化するとともに、主従関係などといった地位差をも生み出す。こうした贈与関係の持つ濃密な関係性と、それと相反する緊張感をともなう

関係性のうち、緊張感をともなう関係性をともなわれないような贈与関係とはどういうものなのだろうか。濃密な関係性という一言では言い切れない関係性があるのではないか。竹沢によれば、共同体と個人との関係において、共同体が個を与えるのではなく、個がみずから共同体に与えるのだという前提に立ち、他者とともに成長する、他者を支えることで自分が支えられるということだが、贈与の精髓を示す言葉なのではないかということ、そして、他者に対して自分を与えていくとき、他者の成長を見返りとして受け止め、自分も成長することで他者に答えるという贈与の応酬こそ、贈与が支配の道具とはならない望ましいありようだという（竹沢1997）。

もちろん、竹沢の言う理想的な贈与ばかりが贈与のあり方とは言い切れない。従属関係を生み出すような権力の、いわば補完装置としての贈与のあり方も、私たちの日々の生活のなかにおいても見え隠れしている。では、私たちの日々の生活の中で行なわれている贈与という営みは、竹沢が言う関係性の変革のテクニクとしての贈与とどのような違いが見られるのか、これからの研究課題であるが、まずはボランティアとはどういうものであるのか、簡単に整理してみたい。

ボランティアということ

ボランティアということの一般的な意味をただ言うなら、以下のとおりである。ボランティアとは、個人、グループ、地域社会が直面する問題を解決し予防するために、あるいは社会や地域社会の向上をめざして、金品・サービスが無償で提供する人々をさして言う。社会福祉、教育・文化、保険・医療など多くの領域でその活動はみられ、その動機に注目するなら、他者を助けたいという愛他主義に基づく行為であり、経済的報酬をともなわない贈与としてとらえら

れる。一方、活動には自己実現や学習の機会となるとともに社会的連帯感を築く機能がある。つまり、心理的な報酬の存在が見られるということである。ほかにも責任感、同情、恩返しを意識も動機になるが、その背景としては宗教、文化、社会意識などが大きく影響を与えている。また、社会政策などの点から見ると、その補完、代替の機能を持つものである。ボランティアと聞くと社会福祉とのつながりを少なからず意識してしまうが、ボランティアはより広範な活動も含む行為である。

ボランティアということの一般的な意味について述べたが、ボランティア活動の一要素としての社会福祉について簡単に述べてみたい。田代不二男はキリスト教の貧民救済に代表されるような社会福祉活動について論じているが、その論の冒頭で社会福祉とは何かということについて、そうしたことについて述べることの難しさを認識しつつ、述べている。しばらく、田代の論を追いかけてみようとおもう。田代によれば、社会福祉という活動は、施与、慈善、博愛、救済というような用語で呼ばれていた援助活動が、時代の要請や時代思潮または時の政府の施政方針によって、一つの社会制度として組織的活動に発展してきたものであるとし、20世紀以前までは慈善活動とされていたと述べている。そして、田代はキリスト教の社会福祉を論じるという前提を述べたうえで、自らの社会福祉についての考え方を概観する。福祉とは幸福、福利、繁栄を言うが、個人個人の幸福を目標にするとその社会は解体するし、社会が社会の成員の幸福とは結びつかない社会全体に固有の幸福を目標にしたなら、全体主義、あるいは独裁主義の社会となってしまう。目標とする福祉とは人々が幸福であるために不可欠な基本的必要物（basic requisites）である、という。福祉＝幸福ではなくて、福祉は幸福であるための基本的条件なのだという。さらに、田代はニコラス・レッシャーの説を引用しながら、レッシャーの

言う身体的福祉、物質的福祉、精神的・心理的福祉についてふれつつ²⁾、そうした福祉が満たされない人がいて、その人たちに手をさしのべることが、社会福祉の原点だというのである(田代 1983)。

ボランティアという行為もまた、田代が言うような社会福祉の原点に基づくものであるのだろうか。田代が言うような背景が、ボランティアにはあるのだろうと考えることは間違いとはいえないだろう。しかし、ボランティアに参加する場合、動機については様々あるようである。田代が言うようなことを意識してボランティア活動をしているのかというと、「ボランティアをしているんだ」と意識するより、無理せずに自分のできる範囲でやろうと思い、ボランティアに参加する場合もあるようである³⁾。むしろ、田代が言うようなことを考えてボランティアをこころざす人たちのほうが希少なかもしれない。ボランティアという行為にはさまざまな局面があるようである。ただし、「何かをしてあげたい」という動機にしても、「何かをしたい」という動機にしても、何らかの対価を得ようとしていないだろうか。ボランティアを行なう“個人”は、それぞれの理由があってボランティアをしているのかもしれない。対して、ボランティアを行なう“団体”は、団体としての理想的なボランティアのあり方を、今現在も模索しているのではないか。NGO などの発展途上国での開発援助活動が最近よく言われているが、開発援助についての問題点もさまざまな立場から指摘されている。援助を行なう側の援助を受ける側に対する理解度のなさなどによる失敗は、どういう問題を背景にしているのか。そうしたボランティアのありようを考えていく上で、贈与という考え方は興味深い視点を与えてくれるように思える。次節では少し視点をかえて、宗教という現象からボランティアと贈与について少し考えてみよう。宗教もまた贈与という考え方を見るには興味深い社会現象であるといえる

からである。

宗教の視点から

震災ボランティアにおいても、宗教団体の関与が見られた。宗教団体が掲げる目標として「人々を苦しみから救う」ということが一つとしてあり、とくに苦しみからの救いを第一義に考える宗教団体であればボランティア活動に関わることは当然のことと言える。震災ボランティアとは関係は無いのであるが、私自身機会があって、信仰を持ち、ボランティア活動をしている人のお話を聞くことがあった。そのときの話で、自らの信仰をボランティアの対象者に対して、あからさまに明示していくということはないが、自らの信仰が自分自身の活動に影響を与えていないということもないと話されていた。また、三木英らが行なった震災ボランティアの研究によると、宗教団体が団体として行なうボランティア活動に関しても、宗教団体の名前を明示することによる抵抗感が被災者にあったことから、宗教団体を前面に押し出すことは控え、そのためか宗教団体のボランティア活動がそれほど世間には目立たなかった。震災ボランティアにおいて、宗教はその信仰を持つ人たちの心のケアを行なうとともに、コミュニティの紐帯を強めていったのではないか。しかし、それは信仰を持つ人たちに限られる機能であり、宗教として社会貢献をしたいという想いとは裏腹に、既存の勢力の範囲内で今までの勤めを真摯に果たすのみという、結果として内向することとなってしまうのではと三木らは問題提起し、様々な宗教が行なった震災ボランティアについて述べている(三木 2001)。

ただし、信仰を持つ人たちのボランティアに関わる背景として、その当人の信仰が背景とはなりえないともいえない。この節では「贈与」という考え方がボランティアにどう関わっているのかということを考えている。震災ボランティ

アに限らず、宗教団体が主体となっておこなっているボランティアにも、贈与という考え方はないのであろうか。宗教そのもののなかにも贈与という考え方はあり、そうした考え方を背景にして宗教団体はボランティアに関わっているのではないか。それでは、宗教に内包された贈与という考えかたは、一体どういう考え方であるのか。佛教を一つの例としてもう少し具体的に述べていこう。

佛教が言うところの与えるということは、「布施を行なう」ということであろう。本来、ブッダが考えるところの佛教には与えるということは明確には示されていない。それは、佛教が悟りというものを主体的に考えていく宗教であったということと関連していると考えられる。悟りということは、自己完結的なものであり、自らの在りようを考えていく哲学的な営みである。悟りを主体的な目的とする信仰から、より多くの人たちを救うということを自らの信条とするようになったのは、一般的に言うところの大乗仏教によるものであり、これから考えていく布施という考え方が深化・拡大されていったのも大乗仏教によるものである。布施とは、むさぼりの心を離れて衣食などを仏や僧、貧しい人などに施与することを言う。施すものの内容などによって区別され⁴⁾、布施を行なうことによって大きな果報を得ることができるとされているが、そのためには清らかな心で行なうべきであるとされている。名利を得るためにはしてはいけない、つまり利他的な行為として布施を考えるというのが、布施を行なう際の心得である。宗教団体がボランティアに関わる場合、こうした考えが背景にあるのではないかと考えられる。

ただし、布施という考え方が無条件にいい考え方だとは言いきれない。布施を行なうということの先には、「自分自身が良い業をつみ、より良い生を生きることができる」という考え方がある。他者にたいしていい事をするというこ

とは、布施を行なう当事者にもいいことがあるということでもある。布施の考え方には、一概にそう言いきれないが、“与えるもの”と“与えられるもの”という権力を生み出してしまような、贈与のシステムに変化してしまう危険があるのではないか。竹沢が言うような、対等な個人どうしの関係としての贈与の背景となりえるのか。もしかすると、宗教という枠が贈与のもつネガティブな面を浮き彫りにさせてしまっているのであらうか。いくつか問題を提起してみたが、こうした他者にたいする行為についての規定は、佛教に限らず様々な宗教において考えられてきたことであった。宗教団体が利他的な行動をとる場合、現代社会において宗教という枠組みは障害となることが多々あるのではないか。しかし、宗教を大きな枠組みでとらえなおし考えてみると、宗教もより理想的な人間関係の形成に寄与できるのではないか。この点はもう少し考察していかなければいけない問題である。

結びにかえて

視点をかえながら、宗教団体のボランティア活動と、宗教がその教義に内包する贈与に関わる考え方について述べた。竹沢が考える贈与の理想的なあり方とは、ボランティアというフィールドにおいてのみ可能なのであろうか。竹沢は家族や地域社会という共同体においても、その中で生きていくうえで参考になるとしている(竹沢 1997)。ボランティアだけが、以上に述べた贈与関係によって成立しているわけではない。しかし、はっきりとした形で贈与関係が現れやすいのもボランティア活動である。ボランティアに参加をしている人達には何かを与えているという明確な意識はないようだが、ボランティアに入ったきっかけとして、仕事などを定年などで辞めることになって、時間的余裕ができ、何か役に立てることをしたかったというき

かけが見られる。それは一種の贈与関係，社会に何らかの貢献をしたいという気持ちから生じるものではないだろうか。時間的な余裕を有効に使いたいという想いもあるようである⁵⁾。より詳細な贈与の感情についての分析は，今後の研究課題としたい。

注

1)『国民生活白書（平成12年版）』によると，その問題意識は，第一に社会，経済，文化，人道，平和構築の分野における優先課題に取り組むためにボランティア活動が必要であること。第二にボランティア活動をサービスとして提供するために，より多くの活動者が必要であること，この2点である。その決議では，ボランティア国際年における目的を4つの柱として明記している。その4つの柱とは，①ボランティアに対する理解を深めること，②ボランティアへの参加が促進される環境を整備，③ボランティアの情報交換に資するネットワークの構築，④ボランティア活動の促進，の4つである。

2) レッシャーが言う主要な三つの福祉について，それを妨害するものについて，田代は，身体的福祉を妨害するものは病気，物質的福祉を妨害するものは貧困，精神的・心理的福祉を妨害するものは，その人の持って生まれた性格的なものもあるかもしれないが，最大のものは非行あ

るいは犯罪であろう（田代 1983），と述べている。

3) この点については，2003年9月7日の聞き取り調査の資料から示唆を得ている。

4) 布施には財物を施す財施，教を施す（説法）法施，恐れなき心を施す（恐怖心を取り除く）施無畏などがあり，以上に述べた三種類を三施とも言う。

5) この点については，2003年8月31日の聞き取り調査の資料から示唆を得ている。

文 献

- 経済企画庁，2000，『国民生活白書（平成12年版）』。
 竹沢尚一郎，1997，『共生の技法——宗教・ボランティア・共同体』海鳥社。
 三木 英編著，2001，『復興と宗教——震災後の人と社会を癒すもの』東方出版。
 田代不二男，1983，『社会福祉とキリスト教』相川書房。

付記：本稿は平成15年度佛教大学特別研究助成（代表：大東貢生）による研究成果の一部である。

（わたなべ しゅうじ
 佛教大学大学院社会学研究科博士課程）
 （とみかわ たく
 佛教大学大学院社会学研究科博士課程）